

## アドルノの自然美学の(ウン)アクチュアリテート

府川 純一郎 (社会学研究科 博士後期課程)

本発表の目的は Th. W. アドルノの遺作となった『美学理論』(1970)において示された自然美学の今日的な有効性を探ることにある。この著作で明示された主張の一つは、19世紀芸術信仰の驕慢によりその地位を貶められた自然美の復権である。彼は「自然の言語」とも換言可能な「自然美そのもの」の経験が芸術に先行するだけでなく、芸術はこれを模倣し、再建・客観的に持続するものに落とし込む行為であると結論付けた。しかし彼のこうした自然美の名誉回復の努力は、その後の自然に対する美的言説の展開に貢献したとは必ずしも言い難い。彼の自然美の芸術への移行性の確保、或は両者の経験を共に「形象」の経験と統括する態度は、彼の死後、環境破壊問題に後押しされつつ急速な展開を見せた環境美学の一つの基本的姿勢、自然美の経験を芸術美のそれとは切り離して経験しようとする姿勢には、(A.カールソンの用語を借りれば)「環境モデル」に対する自然鑑賞の古き「芸術モデル」の一種として差置かれざるを得なかった。また彼の「自然の言語」の存在とその把握性に関する言説は、自然の美的承認を人間からの「一方向的」なものに限定し、自然における主体相似的なものの想定を「形而上学」と裁断する、世俗的・人間中心的自然美学の立場に立つ M.ゼールからは「照応的自然の形而上学への逆行」という手厳しい批判を受けることになった。言表の如何に拘らず、両者の学説は自然とその美的空間の保護の正当性を倫理的次元において構築しようとしている。そのような極めて真っ当な(かつそれは今日的な自然破壊の進展からして極めてアクチュアルであるとも判断して構わないと思われる)言説にとって、アドルノの自然美学は果たして接続不可能なものなのだろうか。

発表者はその接続可能性の追求の方法を、ゼールの批判内容を土台にした『美学理論』の掘り起こしに求める。発表者はその際、アドルノの「自然の言語」における二つの位相という解釈を示す。要約すれば、一つ目は歴史的存在でありながら神話的桎梏の内にある人間が自然に「他なる状態」のユートピア的表象を求めて成立する投影的位相であるが、二つ目の位相は同じく神話的桎梏に囚われた自然存在そのものが苦しみと共に同じ憧れを求めて発するというものであり、これは主体相似的なものとしての自然という想定を必然的に要請するものである。ゼールの人間中心的な姿勢と正面衝突する(それ故彼の批判の妥当性を裏書きしもする)後者の位相は、この言語を擁護する各研究者(J.フリュヒトル、A.ヴェルマー、G.シュヴェッペンホイザー)の言説においても隠微なものにとどまっていた。が、それだけに今日の美学からの自然保護支援への潜在的な接続可能性を秘めているとも思われる。というのも、この想定はアドルノが初期から思想的交流のあったベンヤミンとショーレムのユダ

2016年11月15日発行

ヤ神秘主義に系譜的な関係を持つが、そこから導かれる同じ救済乃至宥和状態への移行を求めるものとしての自然の承認という視座は、神学的・ドグマ的性格を超え、仮想的ではあれ自然との連帯という可能性を開き、今日の自然・環境保護の正当性を戦略的に練り上げようとする美学者の文脈への貢献・接続可能性があると思われるからである。